

ミルク

笠羽流雨

□場所

東京。アーケード商店街の古びたお好み焼き屋「ひぐらし」及び、その近くの河原。

□人物

木戸 涼平……高校二年生、演劇部。戯曲を書いている。

大野 亜紀……高校二年生。涼平の幼馴染で、時々本を借りに来る。

泉 渉……高校二年生、美術部部长。家は銭湯「あけぼの湯」を経営。父龍太は画家。

涼平の幼馴染。

木戸 莊司……五〇代。涼平・陽向の父。「ひぐらし」の店主。

新田 洋一……六〇代。下町のレンズ職人。「ひぐらし」の常連。

木戸 陽向……中学二年生。「あけぼの湯」の常連でもあり、渉と仲がいい。いつも牛乳を飲んでる。

片桐 鈴……大学二年生。畜産を学んでいる。高校では演劇部に所属していた。

木戸 那津……三〇代半ば。鈴の叔母で、小さいころから面倒を見ている。莊司の新しい妻。

木戸 春江……莊司の前妻で、涼平・陽向の実の母親。作中では「母の声」として登場。

黒 子……すべてが不詳。そもそも、存在が胡散臭い。通常の黒子同様舞台上の雑務もこなす。

「あらすじ・概要」

東京の古いアーケード商店街でお好み屋を営む木戸莊司は前妻の春江に捨てられて以来、彼の二人の子供である涼平と陽向を男手一つで育て上げた。涼平は高校では演劇部員として戯曲は書いているが、実の母春江との失われた時間へのこだわりから、スランプ状態に陥っている。そんな中、時折お好み焼き屋に顔を出すようになった那津は莊司の恋人だった。莊司と那津の再婚を受け入れられずにいる涼平。しかし、彼の友人渉と亜紀、妹の陽向、那津の姪の片桐鈴、下町の職人新田洋一との温かな関りによって涼平は次第に母の記憶からの自立へ向けて歩き始める。

○夜桜

舞台は暗転。

河原、夜桜の下。

涼平、懐中電灯をつける。

涼平、地面のあちこちを見ながら何かを探している。

涼平 おかしいなあ、俺は確かにここにいたはずなんだけど。このへんに、桜の花びらが舞い散る中、あの人と一緒に、こうしてここに立っていたはずなんだよ。それなのに、今は……。お前はいったい誰なんだ？

陽向、懐中電灯をつける。

陽向 お兄ちゃん、何探してるの？

涼平 素直で可愛かった頃の俺。

陽向 え？

涼平 いや、何探してるのか忘れた。

陽向 ふーん。あ、桜もうすぐ咲くね。ほら、蕾があんなに膨らんでる。

涼平・陽向、同時に懐中電灯を切る。完全な闇。

音楽。明転と同時に群舞。

○ひぐらし

四月。お好み焼き屋「ひぐらし」のカウンターで、莊司・

那津、話している。

涼平、机に向かって何か書いている。

那津 そろそろ、伝えたほうが良いんじゃないの。

莊司 そりゃあそうなんだけどさ。タイミングが難しいよ。

那津 でも、今の関係が続けるわけにはいかないと思う。

莊司 そうだな……。わかったよ。

那津 じゃあ、またね。

莊司 おっ、気をつけてな。

那津、断ろうとする莊司の手に食事の代金を渡して店を出る。亜紀、那津と入れ替わりに入ってくる。

亜紀 こんにちは。

莊司 あ、亜紀ちゃん。涼平、そのテーブル片づけてくれないか？

涼平 え、なんか言った？ あ、亜紀。

亜紀 ういーっす。この全集面白かったよ。

涼平 何が良かった？

亜紀 うーん、「銀河鉄道の夜」かな。

涼平 ああ、やっぱりね。

莊司 亜紀ちゃん、ついでになんか食べていきなよ。

亜紀 ああ、そうですか。じゃ、そうだなあ、キャラメルキアートで。

莊司、持っていたものを落とす。

涼平 じゃあ、ネギ玉で。

莊司 お前は手伝えよ。

涼平 高校生は忙しいんだよ。

莊司 え？ 遊んでばっかに見えるけど？

涼平 遊んでねえよ。それに、もう春休み終わっちゃうじゃん。早く夏休み来ないかな。あ、でも夏休みは部活か。

亜紀 部活か……。あ、脚本書いてるんだっけ？ どう？

涼平 そろそろハコ書きの締め切りなんだけどねえ……。

亜紀 ハコ書き？

涼平 まあ、大まかなストーリーだよ。でもまだなんにも思いつかない。

亜紀 へえ、そりゃやばいね。

涼平 だいたい締め切り通りに出すなんて無理な話だよ。

亜紀 締め切り伸ばしてもらえないの？

涼平 無理。うちの顧問、鬼だから。

莊司 お待ちどうさま。あれ、スランプですか、涼平先生。

涼平 うっせえな。

亜紀 あ、くまさん。(本当に出てきてしまったキャラメルキアートをのぞき込みながら)

渉、入ってくる。

渉 こんにちは。

莊司 よつ、渉、らっしやい。

渉 あ、お前からまたいちゃいちゃしてんのかよ。

涼平 してねえよ。

渉 ホントかなあ。なんか今くつついてただろ。

亜紀 なに渉、やいてるの？

渉 え、ちげえよ！ あーなんか疎外感を感じるわ。(二人とは少し離れた場所に座りながら)

亜紀 渉、繊細だよね……。

涼平 渉、こっちへおいで。

亜紀 おいでー。おいで。

渉 そこまで言うならしょうがねえなあ。

渉、二人のテーブルに席を移す。

渉 そうそう、なんか今日、表のアーケード暗いですね。

莊司 このあいだ季節外れの雷があったろ。

渉 ああ、ありましたねえ。

亜紀 怖かった。

莊司 その時の落雷で配線が切れちゃったんだよ。

渉 え、マジですか。こえー。あ、えつと、とりあえずシーフード玉の大盛りチーズのト

ッピング、と焼きそばもんじゃ。

莊司 今日も食うね。

渉 食ってないとやってらんないすよ。予備校だけじゃなく、部活もハードだしね。

亜紀 部活って、美術部でしょ。

渉 美術部なめんなよ。超体育会系だから。夏休みには合宿もあるんだよ。

涼平 え、合宿？ 高山でランニングとかすんのか？

渉 高山に絵の具とこんなでっかいキャンバスかついで登るんだよ。

亜紀 へえ。進路はやっぱり美術系？

渉 進路……そうだな、俺、他に才能ないし。

涼平 まあ、確かに、絵は上手いよな。そういやこのあいだ美術館で、お父さんの絵、見た

よ。やっぱすげえな。あれは生まれつき持っている才能なのかね？

渉 まあ親父はDNAが人と違うから。人の気持ちとかぜんぜんわかんないんだぜ、あいつ。

宇宙人なんじゃないかな。

涼平 じゃあ、お前はハーフ？

渉 俺はまっとうな人間だよ。

莊司 はい、お待ち。絵はお父さんに教わってるの？

渉 まさか。予備校ですよ。

莊司 そうなんだ。

渉 亜紀は進路決めてるの？

亜紀 ぜんぜん。まあ、時間はあるわけだし、自分が本当にやりたいものを見つかるよ。あ、勉強はしてるけどね。

渉 楽しそうだな勉強。

亜紀 楽しくないの？

渉 全然。

亜紀 じゃ、あたしはそろそろ帰るわ。

渉 え、もう帰るのか？

亜紀 うん。お会計お願いします。

莊司 あーいいよいよ。無理にひきとめちゃったし。じゃあ、暗いから気をつけてね。

亜紀 え？ あ、じゃあ、ごちそうさまでした。

莊司 ありがとう。また来てね。

亜紀 桜、もうすぐ満開だね。

涼平 え、あ、そうだね。

亜紀、店を出て行く。

渉 はあ、涼平はいいな。

涼平 え？

渉 うちの親父、最低なんですよ。

莊司 え、龍一さん？ あの人か？ この辺じゃあ有名人だけだね。あけぼの湯の隣のお店
買ってアトリエにしちゃったんでしょ。

渉 え、良く知ってますね。

莊司 NHKで紹介されてたし。

渉 ああ、仕事のなんちゃらね。

莊司 絵を教えるに貫えがいいじゃない。

渉 無理っすね。あの人、自分のことしか考えてないから。

莊司 ふうん。

陽向、帰ってくる。

莊司 お帰り。

渉 よ。

陽向 ん。

陽向、牛乳を取り出しパックのまま直に飲み始める。

莊司 おいおい、口付けて飲むなよ。

陽向 どうせすぐ飲んじゃうんだからいいの。

莊司 しょうがねえな。あ、焼きうどんでも食うか？

陽向 うん。

涼平 陽向、どこ行ってた？

陽向 どこって、友達のところ。

涼平 誰のそこだよ。

渉 俺んちだよなあ。

陽向 なあ。

涼平 え、お前らそういう関係だったの？

渉 ばか、銭湯の方だよ。

涼平 え、また？ じいさんばあさんと友達になって楽しいの？

陽向 若い人も来るよ。新田さんとかさ。

莊司 あの人、六〇代だろ。

陽向 え、若くない？ あ、それより聞いて。富士山の絵が新しくなったんだよ。超怖い。

涼平 えっ、現代アートか？

莊司 お父さんが描いたの？

渉 まあ。

莊司 うっわ、さすが商売上手だな。

陽向 いや、もうすごい人だからだったよ。

莊司 だろうな。

渉 ごちそうさま。お金、ここ置いときますね。

莊司 おう、また寄ってね。

渉 じゃ。

涼平 じゃあな。

陽向 ばいばい。

渉、店を出て行く。

涼平 さっきのお客さん、最近よく来るよね。

莊司 さっきのって？

涼平 カウンターにいただろ。

莊司 ああ、那津さんね。

陽向 お父さんと仲良しの人？ 那津さんっていうんだ。友達？

莊司 ー、友達っていうわけじゃないんだけど……なんつーのかな。

涼平 えっ、借金取り？

莊司 そんなふうに見える？

涼平 じゃ、隠し子？

莊司 なわけないだろ。

陽向 占い師？

莊司 え、お前そういう友達いるの？

陽向 いい人だよ。占いは当たらないけど。

涼平 銭湯に来てる人？

陽向 もちろん。

莊司 ……ところでさ、お前らにちょっと折り入って話があるんだけど。

音楽。

○ぼんやりと白いもの

夜の河原。

渉、ぼんやりした様子で星空を眺めている。

涼平、ゆっくり歩いてくる。

涼平 あ。

渉 ー、あれ涼平？

涼平 わ、渉か。

渉 なにやっつてんだよ？ こんなところで。

涼平 渉こそなにやっつてんだよ。

渉 いや、次の絵の構図とか……まあ、いろいろ考えてたんだよ。

涼平 ああ、そうか。

渉 なんか、元氣無いなあ。

涼平 ー、ちよつとね。

渉 なんだよ、話してみろよ。

涼平 ……親父、再婚するかもしれない。

渉 ええっ、まじか。えっと、なんて言えばいいのかな。

涼平 今日は空気が澄んでるな。……ではみなさんは、そういうふうに着たり、乳の流れたあとだと言われたりしていたこのぼんやりと白いものがほんとうは何かご承知ですか？

渉 え、え、何それ。

涼平 ではカンパネルラさん。

渉 えっ……。

涼平 天の川だよ。

渉 なんだよ、それ。

涼平 銀鉄だよ。銀河鉄道の夜。

渉 ああ、なんだっけ、それ。

涼平 宮沢賢治だよ。今度貸そうか。

渉 へ、難しそうだし、いや。

涼平 そうか。

渉 でも、こんな場所でも、星、結構きれいに見えるんだな。

涼平 うん。

音楽。

○一家団欒

五月。

お好み焼き屋のテーブルに、荘司・涼平・陽向・那津、それぞれ緊張した面持ちで向かい合って座っている。

荘司 おっ、焼けたぞ。みんな食べる。

那津 あ、おいしそ。

荘司 それはうまいに決まってるだろ。今日のはスペシャルだからな。これ、ほら、クラゲが入ってるんだよ。クラゲ。クラ……。

気まづい間。

荘司 もんじゃも行くか？

那津 そうね。

荘司 ほらほらみんな手出せー。うまいぞ。こっちにはなあ、イソギンチャクがはいってる

んだよ。

那津 イソギンチャク？

莊司 そう。イシワケイソギンチャク！ 東京では滅多に手に入らないしろものだぞ。食べ
ー。こげちゃうぞ。まあ、おこげもおいしいけどな。お父さん食べちゃうぞー……。あー、
食べちゃった……。。

耐え難い間。

莊司 まだ正式に書類を出したわけじゃないんだ。お前らの意見もちゃんと聞いてだな。

涼平 なんだよ、意見って？

莊司 なんでも言ってみろ。

涼平 なんでも？

莊司 お前ら、来年は高校と大学とダブル受験だろ。いつまでも店を手伝わせるわけにはい
かないと思うんだ。だからだなあ……。。

涼平 頭を整理させる時間がほしい。

莊司 まあ、そうだよな。陽向は？

陽向 実感わかないなあ。お母さんがいるってどんな感じなんだろう。

莊司 そうか、そうだよな。すぐについていう話じゃないんだ……。とにかく食べ。デザート
にあんこ巻き行くか？

陽向 ああ、うん。

莊司 持ってくるから待ってな。

莊司、厨房に入って行く。

三人、無言。

那津、いたたまれなくなって、ハガシを両手に持つ。

那津 えつと……。カヌー。

激烈な沈黙。

音楽。

途中から入る雨の音が音楽をかき消す。

○酒

六月。

お好み焼き屋のカウンターで、莊司、新田、酒を飲んでいる。

莊司 ってな感じでさ。

新田 一家団欒。楽しそうじゃないか。

莊司 からかわないでくださいよ。

新田 でも、春江さんに出て行かれてこの十年、長かっただろ。やっとトンネル抜けたって感じじゃないのか？

莊司 あんな素敵な人と出会えるとは、まあ、人生も捨てたもんじゃないですね。

新田 はいはいはい。まあ、あれだな、障害があると余計に燃えるんだろ、莊司君。燃え尽きないように気をつけなさい。

莊司 燃え尽きませんよ。

新田 でもね、新しい母親が出来ていきなり懐いちゃう方が変な話だよ。

莊司 そう……だよなあ。陽向は大丈夫そうなんだけど。

新田 そうだなあ……。

莊司 涼平のヤツ、再婚の話を出してからずっとあんなでさ。夜になると河原で星を見ているみたいなんだよな。

新田 星を見てるのか。まあ、そういうお年頃だから。あ、これもう一杯頼むよ。

莊司 飲み過ぎですよ。

新田 お前に言われちゃおしまいだな。前はひどかったから。

莊司 そうでしたっけ。

新田 ま、よくがんばった。はい、もう一杯。

莊司 ダメですよ。

新田 いいのいいの、たまには飲まないと。

莊司 もうそんな若くないんだから。

新田 俺はまだ現役だよ。若い奴には負けんぞ。

莊司 え、レンズ工って若い人とか来るんですか？

新田 ああ、工学部卒のヤツとか結構来るよ。

莊司 じゃあ、新田さんのところは安泰ですね。

新田 まあな。

莊司 うちは俺の代で終わりかな。

新田 涼平は？

莊司 まさか、あいつにはやらせませんよ。春江に似て頭がいいから。

新田 そうか。あ、そうそう涼平の誕生日ってそろそろだっけ？

莊司 よく覚えてますね。明後日ですよ。

新田 そうか、じゃあなんかやらんとな。

莊司 そりゃあ、ありがたい。

涼平、帰ってくる。

涼平 ただいま。あ、新田さん。

新田 お、よう。

莊司 何処行ってた？

涼平 河原。

莊司 そうか。……まあ、あんまり夜更かしはするなよ。

涼平 うん。あのさ、お父さんはなんで再婚しようと思ったの？ お母さんのことはもう忘れた？

莊司 そりゃあ、だから、お前らのこともあるしさ。

涼平 お母さんなんていららないよ。

莊司 ……。

新田 まあ、そうだなあ……。

莊司 前のお母さんのことが忘れられないか？

涼平 そんなこと、ないけど。

莊司 お前、お母さんのおっぱいが好きだったからな。

涼平 それはずっと昔の話だろ。

莊司 さあ、どうだか。

涼平 は、どういう意味だよ。

莊司 まあ、もう寝ろ。

涼平、黙って自室に向かう。

莊司 どうしたものかねえ。

新田 乳離れ……できてないのかもな。

莊司 小さいときにいなくなっちゃったから。あいつにとって一番必要な時だったんだよ。

新田 あの時はそういうことを理解するにはまだおさな過ぎだし、理解しないで済ませるには大きすぎた。もっと、甘えたかったんだろうな。

莊司 いろいろ受け入れられないこともあるのかなあ。

新田 でも、お前は那津さんのこと、愛してるんだろ。

莊司 当たり前でしょ。

新田 どういうところが好きなの？ ちょっと教えてよ。

莊司 あの人には心に秘めた何か深いものがあるんだよ。そこにすごく惹かれる。それは俺にしかわからないんだ。

新田 お前はいつも、色々難しい女性に惚れるよね。

新田 新田さんにはわからないんですよ。あの、瞳に隠されたコバルトブルーの輝きがね。

那津、店に入ってくる。

那津 こんばんは。……あれ、二人で飲んでるの？

新田 おつ、うわさをすれば。続きを聞かせてもらいましょうかね。

新田 勘弁してくださいよ。

那津 何の話？

新田 何でもない、何でもない。

新田 もうテレちゃって、可愛いっ。

新田 新田さんそこ、どいて。ほら、那津が座れないよ。

新田 え、僕、もしかしてお邪魔虫？

新田 いやいやいや。

那津 そんなこと。

新田 なあ？

那津 ねえ？

新田 くそ、なんか、妬けるなあ。

新田 いやいやいや。なあ？

那津 勘弁してくださいよ。ねえ？

新田 那津さん、ここにお座りよ。今、冷えてるの出すからさ。はい、ジョッキ。

新田 那津さん、ありがとう。

新田 もう、俺、帰るかな。

新田 (ビール瓶を持ちながら)え、帰りますかあ？

新田 帰らないよ、帰らない。ところで、那津さんはさあ、こいつのどこがいいわけ？ ち

よっと言ってみてよ。

新田 ンー、なんでなのかわからないけど、安心するのよ。

新田 え、どういうこと？ 他にいくらでも男はいるだろ。

新田 あたし、結婚しようとして約束した人がいたの。

新田 え？

新田 式の二週間前に逃げられちゃった。

新田 まさか、結婚詐欺？

新田 ばかよね。それから人を信じられなくなっちゃって。

新田 そ、そうなの？

新田 でも、この人と出会えて不思議と気持ちが変わったの。あ、ほらこの人不器用じゃない。

嘘が下手だし。この人と一緒だったらなんとかやっていけそうな気がする。

新田 そうか……。で、君たち、ぶっちゃけいつ籍入れるんだよ。
莊司 んー、八月頃にしようかと思ってるんだけどお。

新田 八月って、なんか意味あんの？

那津 特に、ないんですけど、陽向ちゃんたちのことを考えると、それくらいかなあと。
莊司 子どもたちが納得する前に、籍入れるわけにいかないっしょ。

新田 ふーん。ところで、さっきから気になってたんだけど、このつまみ何？ やたらうまいね。

莊司 何だと思います？

新田 うーん、イソギンチャクみたいな形してるけど。

那津 イソギンチャクですよ。

新田 は？ はあ？

陽向、眠そうに入ってくる。

新田 あれ、陽向ちゃんどうしたの？

陽向 怖い夢見た。

新田 どんな夢？

陽向 んー、牛乳を飲もうとしたら、どんどんあふれて川になっちゃって。

新田 何それ、牛乳に溺れたの。

陽向 息ができなくて苦しかった。

莊司 うーん、そりゃあよくないなあ。

陽向 夢で良かったよ。ねえ、お酒っておいしい？

莊司 うまいよ。

陽向 牛乳のほうが絶対においしいと思う。

新田 まあ、子どもにはミルクが必要だ。

那津 牛乳にはカルシウムがあるから。

陽向 そうなの。あたし、お父さんよりおつきくなる目標を持つてるから。亜紀ちゃんみたいにさ。

新田 なるほど、いい心がけだな。確かに、パパより大きくなったほうがいいね。

陽向 ねえ、こんな時間に三人で何やってるの？

新田 密会だよ。

那津 何言ってるんですか、違いますよ。ただ仲良く飲んでただけ。

莊司 陽向も一緒に飲むかあ？

新田 ダメだろ。

那津 陽向ちゃんは牛乳を飲めばいいんじゃない？

陽向 うん。

「莊司 そんなじゃあ、乾杯。」
陽向 乾杯。

音楽。

○顔が思い出せない

夕食後のお好み焼き屋。

涼平、机に向かっている。

陽向、那津、少しお互いを意識している。

涼平 陽向、最近はあけぼの湯行ってないんだって？

陽向 あれ、そうかな？

涼平 涉が言ってたぞ。

那津 陽向ちゃんって銭湯に行ったの？

陽向 あ、那津さん、一緒に行く？ 一緒に行こ。

那津 ー、銭湯？ どうしようかな。

陽向 あれ、嫌いなもの？

那津 いや、好きだったんだけどね、最近行ってないから。

陽向 それじゃちようどいいよ。行こうよ。

那津 そうね。じゃ、今日はお店休みだから、三人で行こうか。

陽向 いいね、いいね。あのね、あけぼの湯には面白い友達がたくさんいるの。紹介してあげるね。

那津 ー、ホント？ 嬉しい。涼平君も行くでしょ？

涼平 俺、そんな暇じゃないから。

陽向 そうだ、お兄ちゃんは脚本書いてるんだよね？

涼平 まあな。

那津 でも、気分転換に銭湯に行かない？

陽向 銭湯って男湯と女湯と別れてるんだから、一緒に行ってもしょうがないじゃん。

那津 そうかあ、残念。

陽向 ねえねえ、じゃあ行こうよ。早く早く。

那津 わかったわかった。

那津、陽向、出て行く。

涼平、なにやらぶつぶつ言いながら原稿をいじる。
片桐、不審な様子で入ってくる。

涼平 あれ、どちらさまですか？

片桐 こんばんはー。急にお好み焼き食べたくなっちゃって。

涼平 今日は定休日ですけど。表に看板出てるでしょ。

片桐 あれ、まじ、そうだった？ 見えなかったわ。でも、君がいるじゃん。
涼平 いるけど。

片桐 じゃなんか焼いてよ。

涼平 と言われましても。

片桐 そういう態度とられるとますます食べたくなっちゃうなあ。うん、どうしても食べた
い。

涼平 ええっ、しょうがないなあ。ネギ玉くらいだったらできるかなあ。食べます？

片桐 食べます。

片桐、待ちくたびれてテーブルをコツコツ叩く。

涼平 コツコツやるのやめてもらえますか。

片桐 ああ、ごめんごめん。癖で。

涼平 この近くのかたですか？

片桐 家に帰るのにさあ、電車間違えちっちゃって、下りたら全然違う世界でびっくりした。こ
のへん、ずいぶん古い商店街だね。

涼平 時代錯誤感半端ないでしょ。

片桐 でも、この空気好きだなあ。

涼平 えっと、俺、焼きましようか？

片桐 焼いて焼いて。えっ、そうやって焼くんだ。へー。

涼平 いや、たいていの人は自分で焼きますけどね。

片桐 そうなんだ。

涼平 大学生ですか？

片桐 そうだよ。二年生。あ、私、鈴です。片桐鈴。君は？

涼平 木戸涼平です。片桐さんは大学では何を勉強しているんですか？

片桐 鈴って呼んでよ。

涼平 あ、はい、鈴さん。

片桐 畜産です。

涼平 ちくさん？

片桐 牛とか豚とか鶏とかの生体機能や遺伝子の研究とか飼料開発なんかをするんだよ。

あたしはおもに乳牛の飼育環境の研究。

涼平　へー。

片桐　あのさあ、ここのお店っていつからあるの？

涼平　親父がだいたい若い時に始めたから三十年くらい前かなあ。

片桐　ひぐらしっていい名前だね。どういう意味？

涼平　……さあ、出て行った母がつけた名前ですから。

片桐　あ、そうなんだ。

涼平　まあ、シャッター街にはお似合いかもしれないけど。

片桐　そんなことないよ。ひぐらしと言えばさ、だんだんと怪しい気持ちになっていく時間

じゃない？

涼平　何ですかそれ、徒然草？

片桐　そうそう。硯に向うには良いところよ。

涼平　へー。

涼平　あ、焼けましたよ。

片桐、お好み焼きを味わって食べる。

涼平、それを不審そうに眺める。

片桐　おいしかったあ。いくらですか？

涼平　いくらかなあ。まあ今日はいいですよ。また来てください。

片桐　え、やった。また来ますね。

片桐、お好み焼きの残りをタッパーに入れて出て行く。

涼平、それを不審そうに見送り、再び机に向かう。

涼平　おかしいなあ、書こうとすると、なんだか……えっと、あれは誰だっけ？　なんかあったかい感じ。いい匂いがして……でも、顔が思い出せない。

涼平の背後の障子に春江の影が浮かび上がる。

その影は春江である。

母の声　久しぶり。

涼平　あれ、どちら様ですか？

母の声　涼平。忘れたの？

涼平　え、忘れてないけど。

母の声　嘘。顔忘れてるでしょ。

涼平 顔……顔ね。

母の声 あなたをそんな嘘つきに育てた覚えはないわ。

涼平 育てられた覚えはないけど。

母の声 なんですって。

涼平 お母さん、どうして出て行ったんだよ。

母の声 そうするべきだと思っただからよ。

涼平 そうするべきって、子供を捨てることが？

母の声 もっと、ずっと大事なことがあったの。

涼平 俺や陽向よりも大事ってこと？

母の声 そうよ。

涼平 あなたは母さんじゃない。

母の声 じゃあ、あなたのお母さんはだれ？

涼平 俺に母さんなんていないよ。

障子の影が消える。

陽向・那津、銭湯から帰ってくる。

涼平、机に突っ伏している。

那津 ああ、とつてもいいお湯だった。幸せ。あたし銭湯に入ったの、何年ぶりだったかな。

陽向 でしょでしょ。それに、あの絵、ヤバいでしょ？ 渉君のお父さんが描いたんだよ。

那津 あれねえ。

陽向 あたしも久しぶりに色々な友達に会えて嬉しかったよ。

那津 陽向ちゃんのお友達、あたしのことどう思ったかなあ。

陽向 え、みんな那津さんのこと好きになったと思うよ。(牛乳を飲みながら)

那津 本当？ あ、また牛乳飲むの？

陽向 え、中毒かもね。飲む？

那津 ありがとう。そういう中毒もあるんだね。

陽向 うん。あ、お兄ちゃん寝てる。

音楽。

○バイト

六月。

片桐、お好み焼き屋の掃除をしている。
涼平・亜紀、話しながら入ってくる。

亜紀 で、今度はいつ締め切りなの？

涼平 6月の末。

亜紀 ふーん。で、どこまで進んだの？

涼平 一割……弱。

亜紀 え？ 間に合わなくない？

涼平 間に合わねえよ。

亜紀 ハコ書き書いたんじゃないの。

涼平 なにもストーリーが思いつかなかったの。

亜紀 思いつかなかった？

涼平 亜紀は書いたこと無いからわかんねーんだよ。

片桐 あ、あのさ、きみ脚本書いてるの？

涼平 え、あ、はい。あれ、片桐さん？

亜紀 え、知り合い？

片桐 鈴って呼んで。

涼平 ああ、すいません。いや、知り合いついていうか。

片桐 私、今日からここでバイトすることになりました。

亜紀 あ、えーっと、片桐さん。

片桐 鈴って呼んでよ！ ねえ、その脚本ちょっと見せて。

涼平 え、あ、はい。(脚本を渡しながら)

片桐 ねえ、これ書き込んでいい？

涼平 え、あ、どうぞ。

亜紀 かた……鈴さんは演劇とかなさってるんですか？

片桐 え、まあね。高校でも大学でも。じゃあ、ちょっと読んでくるわ。あ、掃除終わらせ
といて。

涼平 え、あ、はい。え？

片桐、厨房へ入ってゆく。

涼平 俺がやんのか……。

亜紀 ドンマイ。

涼平 何だかなあ。

涼平、ほうきで掃除を始める。

陽向、入ってくる。

陽向 ただいまー。あれ、お父さんは？

涼平 いないみたいなんだけど。

陽向 ふーん。

陽向、片桐を発見する。

陽向 知らない人がいるんだけど。

亜紀 あれ、陽向ちゃんも何も聞いてないんだ。

涼平 なんかさ、あの人昨日来たお客さんなんだよ。それが今日からバイトだって。

陽向 バイト？ 何それ、家にそんなお金あるの？

亜紀 実は泥棒だったりして？(小さな声で)

涼平 大きな声出したら聞こえるだろ。(大きな声で)

陽向 お兄ちゃんの方が声大きいよ。

涼平 ……とにかく、ここは一つ冷静にだなあ。

莊司、入ってくる。

莊司 ただいま。あ、お前ら帰ってたのか。

陽向 あ、お父さん、

莊司 どうした。

陽向 えっと……。その店の奥に変なのが……。

莊司 え、ゴキブリか。

陽向 あ、いや、ちがくて……。

莊司 大丈夫、大丈夫。すぐ片付けてやっから。

莊司、新聞紙を持って厨房へ入って行く。

「パーン」という鋭い音。

片桐 ぐは……。 (声だけ)

涼平 駆除……したか？

亜紀 何言ってるのよ。

片桐 痛い。(声だけ)

莊司 ああ、すまん、すまん。鈴ちゃんか……。 (声だけ)

片桐、荘司、奥から出てくる。

片桐 ああ、もう、何するんですか……。

荘司 ああ、ゴキブリかと思っちゃったよ。

片桐 乙女にゴキブリとは、なんとひどいことか。

荘司 いや、最近視力が落ちて来ちゃってね。あ、紹介するよ。新しくバイトに来た鈴ちゃん。

亜紀 あ、さっき聞きました。

荘司 那津の姪だ。

涼平 那津さんの姪っ子？

片桐 そう、このバイトはおばさんに紹介して貰ったのよ。

涼平 へえ、しかしよくこんな所に来ましたねえ。

片桐 いいところじゃない、雰囲気あって、なんか楽しそう。

涼平 それにお父さんバイト代払えるのかよ。

荘司 ああ、きっちり払うさ。うちだってそこまで切羽詰まってるわけじゃないんだから。涼平 そうかねえ。

片桐 あ、そうそう君の脚本読んだけどね、あれ全然ダメじゃないかな。

涼平 え、そう……ですか？

片桐 ロジカルばかりでストーリーが退屈。それにリアリティーもないしね。

涼平 ロジカル……。

片桐 そう、辞書の言葉が詩でないように論理では感動できないんだよ。

涼平 そうですか。でも、新しいストーリーが思いつかないんですよね。どうしてだろ。

片桐 書くべきものは見つかったの？

涼平 書くべきもの？

片桐 そう。それを見つけないとたぶん書けないよ。

涼平 え、あ、はい。どこにあるんですかね、それ。

片桐 さあ、どこでしょう。

亜紀 書くべきものですよって、涼平先生。

涼平 何だろうね。

亜紀 あたしも、進むべき道が見つからないなあ。

涼平 進路？

亜紀 涉みたいに具体的なビジョンが全然ないから。

涼平 それは俺も一緒だよ。

亜紀 そうかなあ。

陽向 そうそう、亜紀ちゃん。この前貸した本、読んでくれた？

亜紀 罪と罰ね。まあ、読んだけど……。 (本を返しながら)

陽向 どうだった？

亜紀 そうねー。ちょっと重いかなあ。

陽向 ラスコリーニコフ……やばいよねえ。

涼平 陽向、よくあんな血なまぐさいもの読めるなあ。

陽向 血なまぐさいって……お兄ちゃんには分からないだけだよ。

亜紀 じゃあ、あたしそろそろ帰るね。

陽向 うん、じゃあね。

亜紀、帰る。

新田、入ってくる。

新田 こんにちはー。涼平君、誕生日おめでとう。十七になるんだっけ

涼平 はい。

新田 若いなあ。これからだもんな。色々成長する年頃だよ。

涼平 そうなんですか。

新田 あ、これプレゼント。

涼平 お、ありがとうございます。あれ、望遠鏡？

新田 そう、大きいだろう。このレンズはな、非球面レンズという特殊なレンズでな、俺が磨いたんだぜ。

涼平 非球面レンズ？

新田 機械だけではなかなかできないものなんだよ。焦点誤差がとて小さいんだ。

涼平 ふうん、きれいに見えるってことか？

新田 もちろん。俺が作ったしな。

涼平 すげえな。ありがとうございます。実は前から欲しかったんだよ。

新田 どういたしまして。あれ、この子、誰？

莊司 あ、今日からバイトに入った鈴ちゃんね。

新田 え、バイトが入るんだ？ そんな儲かったのか。

莊司 いや、その、那津の姪っ子なんだよ。

片桐 叔母さんが無理に頼んでくれちゃったんです。あたし、いつもバイトの試用期間が終わるとクビになっちゃうんですよ。

新田 へえ、またなんで？

片桐 さあ。周りの人はみんな、あたしのこと注意力がないって言うんですけどね。あたしは実感ないんですけど。

陽向 注意力がない。

新田 へえ。

那津、入ってくる。

莊司 あ、おう。

那津 こんにちは。あ、鈴ちゃん、ちゃんとやってる？

片桐 やってますよ。

陽向 えー、さっき寝てたじゃん。

片桐 あれは、……あれは、ゴキブリをおびき寄せてたんですよ。

莊司 ああ、確かにゴキブリに見えたよ。

片桐 知っていましたか？ゴキブリは集合フェロモンを持っていて、仲間近づいていく性質があるんですよ。

陽向 何それ、面白い。

那津 陽向ちゃん、お店のこと色々教えてあげてね。

陽向 はい。

片桐 よろしくお願いしまーす。

涼平、望遠鏡を持って静かに出て行く。

○おっばい

夜の河原。

蝉の声。

渉、座り込んで、棒で地面に絵を描いている。

歩いてきた涼平、気づかずに渉の絵を踏む。

渉 ああ、俺の絵を踏むなよ。

涼平 あ、ごめんごめん。っってお前はアルキメデスかよ。

渉 何それ。

涼平 アルキメデスって、そうやって殺されちゃったんだよ。

渉 へえ。亜紀はまだ来ないのか？

涼平 ああ、一緒には来てない。

渉 そっか……。

涼平 お、あそこカシオペア座が見えるぞ。

渉 よくこんなたくさん星があるとところで星座なんか見つけられるな。

涼平 慣れればすぐわかるよ。それにカシオペア座は周りに明るい星が少ないから見つけ

やすいんだ。あ、ほら渉も見てみるよ。

渉 へえ、これが例のやつか。しかし、すっかり天体マニアになっちゃって。どれどれ、お、やっぱりきれいだなあ。カシオペア座ってこのWの形したやつだろ。

涼平 ああ。

渉 あの、出っ張ってるところのオレンジ色の星がきれいだ。

涼平 ああ、シエダルね。

渉 シエダルか、いい名前だなあ。どういう意味なんだ

涼平 おっばいって意味だよ

渉 え？ おっばい！ まじか、このWの形の星たち全部がおっばいを表現してたのか！

涼平 いや、その星がたまたまカシオペアの胸に位置するんだよ。

渉 いや、でも俺もこの星座が上から見たおっばいにしか見えなくなってきたよ。

涼平 想像力豊かだなあ

渉 なあ、このシエダルじゃない方の乳首の星はなんていうんだ。

涼平 ああ、ルクバーのこと？ そこは膝だよ。

渉 シケてんな。これおっばいだと思って見ると楽しいぞ。おっばいはさ、やっぱり大きさを

じゃなくて形だよ、涼平君。

涼平 あ……。(亜紀の存在に気がついて)

渉 このカシオペアのおっばいはさ、ちょっと左右非対称だけど、それはそれでそそるよね。

不完全の美？ みたいなさ。あつ、てか涼平君は何カップが好き？ 俺はさあ……。そうだな。

涼平 渉。

渉 なに？ あ、そうおっばいと言えばさ亜紀は壁だよなあ。いや、でも、控えめな感じも

嫌いじゃないんだけどさ。もうちょっとサービスしてもいいんじゃないかって。

涼平 亜紀、亜紀来てる。

渉 え、え、う、うわおお。(跳ねのけながら)

亜紀 渉のスケベなところは昔から変わらんないね。

渉 スケベってなんだよ、あ、でも、真面目な話、人には胎内回帰欲求つてのがあってさ。

おっばいに憧れるって、まあ、ある意味自然なことなんじゃないかな。

涼平 お前、屁理屈になると急に賢くなるな。

渉 え、そう。しかし流星群全然見えねえなあ。

亜紀 もう少し待ってみない？

○夏休み

音楽(ロック)。

渉を筆頭に、音楽に合わせて台詞付きの群舞。

《夏休み！

長髪彼女と制服デート！

宿題なんかは後回し！

ポカリ飲まなきゃ！

恋しなきゃ！

水着！

プール！

浴衣！

花火！

Do you love me? I love you!

我喜欢你 我爱你！》

各々絶叫し、暴れまわり、はけてゆく。

お好み焼き屋。渉・荘司・片桐、話している。

荘司 若い人はよく食うねえ。エネルギーが違うなあ。

渉 今日から夏休みですからね。もうすぐ合宿だし。あれ、涼平はまだ脚本書いているの？

荘司 そうみたいだね。最近、あいつ、いつ寝てるんだか。

渉 そんなに書いているんだ。すごえな。俺もスタミナつけてがんばらなきゃ。

亜紀、入ってくる。

亜紀 こんにちは。

渉 お、よお。

亜紀 あれ、涉いたんだ。涼平は？

渉 お前からできてんのかよ。

亜紀 何イライラしてるの？ あ、涼平いますか？

片桐 脚本のことで悩んでるみたいよ。

亜紀 最近こもりすぎだと思うけど、大丈夫なの？

渉 なんだよ、涼平のことばかり心配して。俺のことも心配しろよ。

亜紀 渉は心配する必要あるの？

渉 あるある、大ありだよ。

片桐 これだけ食べてれば大丈夫でしょう。

亜紀 涼平はちゃんと食べてるんですか？

莊司 どうかなあ。

片桐 あのさ、叔母さんと涼平君って大丈夫なのかなあ。

莊司 ああ、うん。あいつは前の母親が忘れられないんだよなあ。

片桐 前のお母さん……この店の名前考えた人？

莊司 よく知ってるなあ。

片桐 涼平君が言ってた。

莊司 やっぱりな。

亜紀 那津さんとはどうするんですか？

莊司 まあ、いつまでも待たせるわけにはいかないしなあ。八月には籍を入れようって言うてたんだが。

涉 え、八月？

音楽。

涼平、机に伏している。

ほかの人物はそれぞれの場所で後ろ向きに立っている。

涼平、目を覚ます。

涼平 あれ、寝ちゃったのか。ああ、そうだはやく続きを書かないと。いま、何時だ。あれ、

時計ってどうやって読むんだっけ？ あれ、俺はどこだ。

陽向(声) お兄ちゃん。

莊司(声) 涼平、あんまり夜更かしするなよ。

那津(声) 涼平君、よろしく。

片桐(声) 脚本、頑張ってる。

亜紀(声) 涼平。

涉(声) 俺の絵を踏むなよ。

母の声 もっと、ずっと大切なものがあるの。

涼平 もう、やめてくれ。

陽向(声) 大丈夫？

母の声 どうしたの、涼平？

涼平 もういい。記憶のくせに俺にしゃべりかけるな。

母の声 思い出たって言ってもらいたいものね。

小鳥のさえずり。遠い春の記憶。

陽向 ねえ、桜ってお母さんみたい。

母の声 え、そう？ でも、あの花びらってカエルの卵みたいにも見えるけどねえ。

涼平 そんなこと思うのはお母さんだけだよ。

母の声 そうかなあ。

陽向 あれ、お母さんどこへ行くの？

涼平 お母さん！

母の声 あっちまでかけっこしない？

涼平 お母さん待って。

母の声 もう、遅いなあ。お母さん先に行っちゃうよ。

陽向 まってよ。

涼平 行かないで、かあさん。ねえ、どこへ行くの？

暗転。

母の声 もっと、ずっと大切なものがあるの。

○ABCたちとFダッシュ

音楽(ダンスミュージック)。

明転。

河原。

亜紀・涼平・黒子・那津、それぞれABC Dと書かれた白い袋を被り、手拍子をしてリズムを刻みながら入ってくる。

渉、上半身をはだけた状態で入ってきて、激しく絵を描く。画面はモルフォ蝶、火山、隕石、食虫植物、太陽など様々なモチーフの出鱈目な配置によって構成されており、極めて色彩的でなければならぬ。また、微妙な明暗による繊細なニュアンスはなく、瞬間的なインパクトをのみを最大にするような絵である必要がある。完成すると全員で拍手喝采。

渉 ふーむ。

A 亜紀 うわあすごい。

渉 え、それほどでもないよ部員Aさん。

B 涼平 やっぱり渉君うまいなあ。

渉 何言ってるんだよ。部員B君の技術にはかなわないよ。

D 片桐 評論家Fに言わしてみればカオスの根源とか不条理への問いとかいうんだろうなあ。ねえ、部員Aさん。

A 亜紀 それは評論家FじゃなくてFダッシュの方じゃないの部員Dダッシュ……じゃないくて部員Dさん。

C 黒子 でもやっぱ才能がちげえなあ。顧問Eが黙っちゃうもわけないよ。

渉 部員C君、この絵は才能じゃなくて努力だけ。部員C君や他の部員A〜Eたちも頑張れば俺みたいになれるさ。

B 涼平 Eは顧問だよ。

渉 あ、そっか。

D 片桐 才能に溢れていながらも、努力を怠らず、そして謙虚。渉君は人間国宝になるべきだわ！

渉 え？ 部員Dさん、まじで言ってるの？

D 片桐 マジマジマジだって。

B 涼平 ほんとすごいよ。俺たちこれからも渉君について行くよ！

D 片桐 うん！

音楽、「ABCのうた」。

音楽に合わせてそれぞれが、渉を崇めるような動きをする。

渉が手を叩くと同時に全員ストップ。

渉 っと、なるはずだったんだ。

瞬間、ストップモーションがとかれ、それぞれかぶっていた袋を後ろに投げ捨てる。

涼平 まあ、気にすんなって。万人受けする表現なんてないよ。

渉 でも、合宿だけ。せつかくこっちが気持ちよくなってるのにさ、あんな酷評されたらさすがに心が折れるよ。

黒子 だから気にすんなって。どうせ、その部員たちってのも大した奴じゃないんだろ。

渉 え、お前誰だよ。まあいいや。

涼平 え、いいのかよ。誰？

渉 でもあいつらの言ってたこともなんとなくわかるんだ。この絵には何か根本的なものが足りない。

片桐 確かに言われてみればそんなような気もするけどねえ。なにが足りないんだろ。うーん。

亜紀 あのさ、ちょっと気になったんだけど、なんで回想のシーン、名前がみんなアルファベットだった？

渉 ああ、興味ない奴の名前、覚えられないんだ。

片桐 興味がなければ無理でしょ。

涼平 あ、それ俺もだよ。

渉 お前、昔っから忘れっぽいもんな。それより、足りないもの、足りないもの。

片桐 なんか、ちよっとした意識みたいなものじゃないかな。

渉 意識？

黒子 どこにフォーカスしていかってことじゃないか。

片桐 あ、なるほど。一緒に舞台に出ている、見えない奴っているんだよね。

亜紀 それは黒子でしょ？

涼平 何を描くべきなのか。何が必要なのか。

黒子 何が必要なのか。

○記憶のゴミ箱

八月。朝のお好み焼き屋。

蝉の声。

片桐・那津、話している。

片桐 おばさん、この家に住み始めてどう？

那津 えっ、そうね。生活が一変したっていうか。でも、世界が開けたって感じかな。

片桐 へえ、そうなんだ。涼平君とはどう？

那津 まだ、ほとんど話せてないなあ。

片桐 そうなんだ……。

那津 それより鈴ちゃん、だいぶお仕事慣れたみたいね

片桐 ここって色んなタイプのお客さんが来るから面白いの。

那津 そう……。よかった。

片桐 同じことの繰り返しだったら私はすぐ飽きちゃうからね。

那津 でも、あなたもだいぶ変わったよね。昔は三十秒も止まってられない子だったんだから。

片桐 そうだっけ？ あーでもそうかもね。いまは大学の九十分の講義が当たり前だし。

陽向、入ってくる。

陽向 おはよございます。(あくびを噛み殺しながら)

那津 あ、陽向ちゃんおはよう。あれ、涼平君は？

陽向 まだ二階でゴロゴロしてると思うよ。(牛乳をとりに行きながら)

那津 そっかー。じゃあ、私これから用事があるから。あ、あと、お父さんも一日商店街組合にいつてるから。今日はお留守番たのみますね。じゃあ、鈴ちゃんこれ鍵、じゃあ、よろしくね。

那津、出かける。

片桐、冷蔵庫から牛乳を取り出し、口をつけて飲む。

陽向 鈴さん、それあたしの牛乳ですよ。

片桐 ん？

陽向 何飲んでるんですか。ああ、もうほとんど残ってない。

陽向、残りの牛乳を飲み干す。

片桐 牛乳好きだね。

陽向 あーあ、もう、八月ですよ。夏休みがあ。

片桐 ああ、そうか。でも、夏休みはこれからでしょ。陽向ちゃんは何するの。

陽向 なにする……特にすることないですよね。とりあえず宿題やってあとは一日中ゴロゴロしますかね。

片桐 え、宿題？ どうせ来年受験生になると遊べないんだから今のうちに楽しんでおきなさいよ。

陽向 はい。

涼平、入ってくる。

片桐 あれ、それ新しい脚本？ 読ませてよ。

涼平 ん？ こんなのは読んでもしょうがないですよ。

片桐 それっていつ上演するの？

涼平 あ、八月の末です。

片桐 へえ、じゃあ行ければ見に行くよ。えーっと、どれどれ見せて。

涼平 これ？ どうぞ。あ、陽向。父さんと那津さんは？

陽向 二人ともでかけてる。

涼平 そっか。

陽向 なんか、表の電気の工事、組合でお金が決まり次第やるみたいよ。

涼平 へえ、

陽向 明るくなったらお客さん増えるかな？

涼平 変わんねえだろ。

片桐 ……あれ、全然変わってないじゃん。

涼平 ちょっとは書いたんですけどね。もともと才能ないんじゃないかな。

片桐 才能ねえ。ある人にはある。ない人にはないね。それは役割だから。

涼平 は？

片桐 みんながみんな一流ではないんだよ。あなたの書きたいものは何？ 何を書くべきなの？

涼平 本当は……書くべきことなんて何もありませんよ。

片桐 そう……見つからないようじゃどうしようもないね。

涼平 え？

片桐 みんながみんな戯曲家じゃない。世の中には色々な役割を持った人がいる。

涼平 かわりはいくらでもいる？

片桐 そういうわけじゃないんだけど。

涼平 じゃあ、これいらないね。

涼平、脚本をゴミ箱に捨てる。

片桐 え？ 何やってるの？

涼平 何って……。

片桐 それでいいの？

涼平 だって、しょうがないじゃないですか。僕の平凡な人生のどこを表現する必要があるって言うんですか。

片桐 平凡？

片桐の小学校時代の教室の授業。

先生に扮した黒子が白い袋を持って入ってくる。

先生 完全変態の昆虫は幼虫から成虫になるときにさなぎになります。そして、その後、さなぎは脱皮して成虫になります。これはいわば……。おや、鈴ちゃん、今日はずっとイスに座っていて偉いね。はい、これかぶってください。

片桐 え、いりません。

先生 おや、何書いてるんだい？

片桐 お話。

先生 鈴ちゃん。今、理科の時間ですよ。そのノートは閉じて、理科の教科書を出しなさい。それから、はい、これかぶって。

片桐 はい。(席を立てうろろしながら)

先生 すずちゃん、ちゃんと席についてください。

片桐 はい。(ますます歩き回りながら)

先生 すずちゃん、見てごらん、みんなちゃんと座っているよ。どうしてあなただけできないの？ はい、これ、かぶってごらん？

片桐 わあああ。(絶叫)

先生、驚いて尻もちをつき、怯えながら出て行く。

片桐 平凡な人間なんているわけないじゃん。表面ばかり取り繕って大事なことから目をそらしてない？

涼平 大事なことって？

片桐 誰しもが持つてる、心の奥底にあるもの。

陽向 あのさあ、お兄ちゃんって、平凡なのが偉いと思ってるわけ？ ばっかみたい。

涼平 え？

十年前。

莊司と、その前妻春江の対話。

莊司、入ってきて正面を向いて正座。

障子に女の影。

莊司 春江、俺達やり直せないかな。まだ、間に合うと思うんだけど。もう一晩考えてみるっていうのはどうかな。気が変わるかもしれないだろ。変わらない。どうしてもやりたいことがある。そうか。確かに、お前に音楽の才能があることはわかるよ。でも、子供が二人もいるんだぞ。育てる責任があるんだ。自分のことしか考えない奴に、子供は絶対に渡せないぞ。え、いらぬ。足手まとい。が、外国に行くのか。そうか、そうなんだ。わかった。わかったよ。もう、終わりなんだな。

莊司、書類に印鑑を捺す。

瞬間、障子から「木戸」と書かれた傘が飛び出す。

莊司、傘をさして出て行く。

涼平 そうだ、俺は捨てられたんだ。

陽向 大丈夫、お兄ちゃん？

涼平 俺達、お母さんに捨てられたんだ。

陽向 そうだよ、今頃気がついた？

涼平、ゴミ箱からくしゃくしゃの脚本を出す。
音楽。

涼平 俺、やっぱり書こうかな。

片桐 才能なくても？

涼平 自分の物語を見つけた。俺にしか書けないものがあるかもしれない。

○川のなか

河原。

ひぐらしの声。

陽向、大人びた声と猛烈な気迫で突然歌いだす。

渉・黒子、絵を持って入ってくる。

陽向 あ、渉君、いたのか。

渉 あいかわらず、歌、うまいね。

陽向 え、そりゃあどうも。

渉 最近、あんまり銭湯来ないね。

陽向 まあ、いろいろあって……。それ、絵、描いてるの？

渉 まあね。

陽向 何の絵？

渉 何って言われてもなあ……。大地かな。

陽向 へー頑張ってる。

渉 あ、ちょっと待ってこの絵って何が足りないと思う？

陽向 え、絵のことは全然わかんないよ。

渉 なんでもいいからさ。君が感じたこと。

陽向 ん、色……。かな。

渉 色？

陽向 じゃあ、ちょっと探し物があるんで。

渉 探し物？

陽向 うん。私の中の深いところにあるもの。

渉 なんだよ、それ。

陽向 ずっと昔に忘れた。

渉 あ、陽向……。

陽向、立ち去る。

渉 色か。そうだ色だ。何で気づかなかったんだろう。色が足りないんだ。あれ、陽向？ そ
っちは川だぞ。おい、ちょっと待てよ。

渉、陽向を追う。

涼平・片桐、やってくる。

涼平 特別一等星でない人間はどうすればいいんでしょうか。

片桐 書きたいものがあるんでしょ？ 大丈夫。

涼平 でも。

片桐 それじゃ、あとはひとりで行きたまえ。

涼平 え？

片桐 私はここまで。あとは真っ直ぐ行くんだよ。

涼平 はい。

二人、別れて反対に向かう。

涼平 あれ？ ここはどこだ？ あ、渉！

渉、流されてくる。

渉 ここって、たぶん川の中だぞ。

陽向、流されてくる。

三人、流れに飲まれる。

陽向 そう、ここは牛乳の川、こうやって、すーいすーいと泳いでいるのよ。

涼平 お前何やってんだ。あれ、ここはどこだ？

渉 ここって、たぶん川の中だぞ。

陽向 そう、ここは牛乳の川、こうやって、すーいすーいと泳いでいるのよ。

涼平 お前何やってんだ。あれ、ここはどこだ？

渉 ここって、たぶん川の中だぞ。

陽向 そう、ここは牛乳の川、こうやって、すーいすーいと泳いでいるのよ。

涼平 お前何やってんだ。あれ、ここはどこだ？
渉 ここって、たぶん川の中だぞ。

陽向 そう、ここは牛乳の川、こうやって、すーいすーいと。

渉 おい、このままいくと、俺達回り続けるぞ。

涼平 お前何言ってんだ。あれ、ここはどこだ？

渉 ここって、たぶん川の中。

陽向 そう、ここは牛乳の。

渉 おい。

涼平 お前何言ってんだ。

渉 おい。おい。おーい。待て。

涼平 何だよ。あれ、ここは。

渉 よどみを、抜けるぞ。

涼平 あれ、今の川のよどみだったのか。

陽向 なんか体が軽いね。

音楽。

群舞。

渉 俺さ、ちっちゃい頃は一等星になれると思ってたんだ。

涼平 へ？

渉 でもさ、俺の親父、俺のことなんかどうでもいいみたいなんだ。せめて一度くらい認め
てほしかったよ。

涼平 お前とお父さんは違う人間だろ。

渉 特別一等星でない人間はどうすればいいんだ。

涼平 え？ バカ。お前にしか出来ないことをするんだよ。

渉 俺にしかできないこと？

涼平 川の底の砂や砂利の粒だってみんな違うんだ。ぼんやりと見える星たちだって。

渉 そうか。

涼平 描くべきものはお前の中にもうあるんだろ。

渉 うん、ようやく思い出したよ。

涼平 カンパネルラ、本当の幸いは一体何だろうね。

渉 俺にはわからない。

陽向 ねえ、あそこに誰がいる。

涼平 俺たちのお母さんだ。

陽向 え、誰？ 知らない人だよ。

涼平 いや、お母さんだよ。

母の声 涼平、それ以上こっちにきてはダメ。こっちの世界は危険よ。あっちに行きなさい。
あなたの来るところじゃないわ。

涼平 大丈夫だよ、お母さん。もう迷わないから。

母の声 どういうこと？

涼平 あなたと、俺は違う人間だから。

涉 忘れていたよ。色じゃないんだ。足りないものは俺の中にあった。

涼平 さあ、家へ帰ろう。

○お祝いの会

お好み焼き屋。

新田・莊司・那津・片桐・涼平・亜紀・涉・陽向・黒子、談笑。黒子は一切声を発さないが周りにうまく溶け込んで酒を飲み、会を楽しんでいる。

新田 それじゃあ、結婚と新しい家族の門出を祝って……っでいいの？ あれ、今日って何のお祝い？

莊司 いや、ちよつと待って。今日は皆さん、集まっていたいてありがとうございます。

お好み焼きともんじゃしかありませんが、たくさん食べてください。今日は食べ放題ですの。

涉 おつ、気分がいいっすね。何食べようかな。トッピングもいいんですか？ あ、クラゲがおいしいって聞いた。

涼平 げっ、あれはまずいよ。

那津 え、もうあたし食べてるよ。ほら。

涼平 お母さんって、ゲテモノ趣味だからね。

那津 え、今なんて言ったの？

涼平 ゲテモノ趣味。

陽向 その前だよ。

涼平 え？ なんか言ったっけ？

那津 お母さん。

涼平 ああ。

莊司 初めて言ったな。

新田 なるほど、お前も変わったな。

涼平 そうかなあ。まあ、お父さんは変わらないけどね。

莊司 俺はいいんだよ。……あ、それより、実は皆さんに大事な報告があるんだ。涼平と陽

向にはもう言ったんだけど。

片桐 大事な報告？

新田 なんだよそれ。

那津 えっと、実はですね。赤ちゃんを授かりまして。

新田 っへ？

片桐 え、すごい、それはおめでとうございます。

莊司 そういわけで……。あの、はい。

新田 ああ、わかったわかった。那津さんのご懐妊をお祝いして、乾杯。

全員 乾杯。

渉 でも、陽向がお姉さんになるのか。大丈夫なの？

陽向 え、なに？ なんか不安ですか？

渉 いや、まあ。

陽向 こう見えてあたしだって色々悩んで大きくなってんだからね。

渉 分かってるよ。

亜紀 そうそう、脚本は書けたの？

涼平 まあ、ぼちぼち。

亜紀 ふーん。

涼平 進路は？

亜紀 まあ、ぼちぼち。

涼平 何だよそれ。

亜紀 あ、そうそう牛乳って身長とあまり関係ないんだって？

陽向、牛乳をこぼす。

那津 ああ、陽向ちゃん大丈夫？（雑巾を出しながら）

陽向 大丈夫。お母さんは座ってて。ああ、もうまじかよお。

片桐 どんまい。

暗転。

音楽。

○ミルク

涼平・陽向、二人とも白い袋を被っている。

涼平、懐中電灯をつける。

涼平 お前はいつたい誰なんだ？

陽向、懐中電灯をつける。

那津、入ってくる。

陽向 お兄ちゃん、探してるもの見つかったの。

涼平 素直で可愛かった頃の俺？

陽向 そう。

涼平 いや、もうどうでもいいんだ。俺は俺だ。

那津 そうね。

涼平 (袋をとって)あ、母さん。

明転。

那津 見て、星がきれいよ。

涼平 うわっ、すげえ。お前もとってみろよ。

陽向 え、うん。(袋をとる)

那津 あの星とあれとあれとあれをつないだら、涼平君と陽向ちゃんに見えるね。ほらほら。

涼平 どれどれ

陽向 想像力たくましすぎ。

亜紀・渉・荘司・新田・片桐・黒子、無音で楽しそうに

笑いながら入ってくる。

亜紀、望遠鏡を持ってきて、舞台中央に置く。

涼平、望遠鏡をのぞく。

亜紀 このぼんやりと白い銀河を大きないい望遠鏡で見ますと、もうたくさんの小さな星に見えます。ジヨバンニさん、そうでしょう。

涼平 うん、見えるよ。亜紀も見してみる？

亜紀 うん。天の川って、ミルクィウェイっていうじゃない？ ミルクをこぼしただなんてちょっとかわいいよね。

涼平 そうだね。

音楽。

暗転。

音楽に合わせてそれぞれの人物が隠し持っていた手元灯りを点滅させる。それらは闇の中にくくつもの星座を形作る。
音楽とともに、全ての光が瞬間的に消える。

—幕—

【引用文献】

宮沢賢治『宮沢賢治全集7』ちくま文庫

初演 神奈川県 桜美林大学・ブルヌスホール 二〇一七年八月二十六日